



＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊

4月23日
13:15～14:45

【会場】
富山大学共通教育棟
C棟C21番教室

＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊ ～ ＊

シンポジウム

子どもの挑戦力を引き出すには

子どもは自然や社会に向けて挑戦を繰り返し成長していく。地域はこれを支えるために、挑戦力を引き出す環境づくりや挑戦力の醸成に努めている。これらは挑戦の対象や地域によって特徴的な展開を呈している。

ここでは、挑戦の対象を自然、社会、伝統に限定して、富山における特徴的な取り組みとして、「立山学校登山」、「14歳の挑戦」、「伝統芸能八尾おわら」の三種にスポットを当て、子どもの挑戦スピリットや挑戦力の実情を理解するとともに今後に向けてのあり様を議論したい。各取り組みの概要および議論のポイントを列挙する。

1. 立山学校登山：自然への挑戦 → アイデンティティへ

富山では夏場に県内（多くの）子どもを対象として小学校ごと立山山頂に登る立山学校登山が戦後から実施され今日に至っている。

これは、精神の鍛えから親子のふれあいへと目的を変えながらも、県民のアイデンティティを形成する貴重な体験として県民には定着しているとされている。ここでは、子どもにとっての登山の必要性和効果を探り、県民性も含めて議論したい。

2. 14歳の挑戦：社会への挑戦 → 社会人としてちょびり自覚

富山県では子ども期から社会性を身につけさせることを目的に総合学習の一環として「14歳の挑戦」という社会体験事業が十数年前から始まり、これがその後の文科省の政策とあいまってキャリア教育の事業とかわっていった。

ここでは、当該事業の意義を社会体験やキャリア育成の面から検討し、併せて各地域における事業の実情とあり方について議論したい。

3. 八尾おわら：伝統への挑戦 → 物心ついたら八尾もん

八尾の伝統芸能「おわら」については、子どもから大人まで全員が盛り上げ、これが地域の情熱とプライドとなり、伝統芸能を支える人を育てている。なぜそれができたのか、子どもから大人までが支える地域の視点から議論したい。

なおシンポジウム終了後、子どもおわらの演舞についてみなさまにご堪能いただきます。



富樫 豊
Yutaka TOGASHI

北陸こども環境研究会代表。
1949年富山生まれの富山育ち。1974年から大学で研究教育、1986年から建設系コンサルタントで実務、1988年から地元専門学校で教師、2010年に退職後、市の教育委員会を経て現在、地元の村では「顔」を務めている。学会は、こども環境学会と建築学会に所属。朝活（週1回、若者を対象にしたミニ勉強会やミニ交流会）、歴史発掘、こども環境づくり、地域づくりなどを通してコミュニケーションの場づくりや語り合いを楽しんでいる。

◆パネリスト

増田準三（NPO法人立山自然保護ネットワーク副理事長）

星野正義（富山大学人間発達科学部特任教授）

吉田 渉（一般社団法人富山県民謡越中おわら保存会 教育研究部長）✓

橘 賢美（一般社団法人富山県民謡越中おわら保存会 渉外部長）✓

◆コーディネーター

富樫 豊（北陸こども環境研究会代表）

◆コメンテーター

福岡孝純（日本女子体育大学招聘教授）✓

山口和子（男女共同参画社会基本法ネットワークin富山35世話人）



立山登山



五箇山合掌造りの屋根の葺き替えに挑戦



おわら

立山学校登山について



増田 準三
Junzou MASUDA

NPO法人立山自然保護ネットワーク副理事長。
1948年福井県鯖江市生まれ。富山大学文理学部理学科卒。
1974年より立山連峰の自然を守る会事務局員。2004年2月に法人化し、改称したNPO法人立山自然保護ネットワークの理事に就任。2013年6月よりNPO法人立山自然保護ネットワーク副理事長。自然保護と青少年への自然啓蒙に携わっている。



立山は、古より富士山、白山と共に三霊山と呼ばれ崇められてきました。山に籠もり厳しい修行を行うことで悟りを得るための修験者の山でした。江戸時代に入ると、民衆にも信仰登山が広まり、越中男子は15～16才になると成人の証として集団で立山登拝する習わしが始まり、立山に登って一人前の男と認められたということです。

明治以降、立山登拝は小学校の集団登山として行われてきました。2003年7月21日に、学校登山中の学童が転落し死亡するという事故が発生しました。この事故の教訓は、学校登山のあり方を見直すきっかけとなりました。

学校登山は、精神鍛錬や自然学習などを目的としていますが、山頂への登頂を優先とした学校の集団登山には多くの問題があります。

例えば、

- ◎クラスごとに隊列を組んだ小学生が、登山ガイドなどの先導に従って黙々と歩き、登山道の脇に咲く高山植物にはほとんど目を向けることはない。
- ◎玉のような汗をかき息も絶え絶えに必死についていく児童、涼しい顔で歩く児童、友達に声を掛け励まししながら歩く児童が列をなして登・下山している。
- ✓ ◎狭い登山道でもほかの登山者に先を譲ることはほとんどなく、感謝の声もない。
- ◎雪渓上で、恐る恐る滑ったり転んだりしながら進むため、大渋滞を引き起こす。

学校登山は、体格差の大きい小学生にとってはさまざまな問題を引き起こしています。さらに、集団で行動することによってリスクが増大し、大きな事故につながりかねない危険性を含んでいます。また、登山道の荒廃や自然に与える影響も懸念されます。

子どもたちの感想は、すばらしい経験をしたなど肯定的な声が多く寄せられているのですが、本当はどうでしょうか。かつて学校登山を経験した人たちから聞く声は、二度と登りたくないと思ったというものが多く、学校で書く感想文は建て前であって本音はまったく違うのではないのでしょうか。

体力の伴わない小学生の学校登山は、山頂に登ることを第一とするよりも、室堂平や弥陀ヶ原でライチョウや高山植物などの自然に触れ、高山での動植物の生活や保全・保護について学び、考えることの方がより重要でしょう。山頂を目指すいわゆる登山は、中学生以上で十分なのではないのでしょうか。

注) 立山学校登山：小学校ごとに主に6年生全員を対象として実施されている立山登頂の登山のこと。学校の裁量で行事を実施（実施率は50%程）。最近ではPTA行事として実施されることも多い。



地域の協力を得た 「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業



星野 正義
Masayoshi HOSHINO

富山大学人間発達科学部教職特任教授。

1953年 富山県射水市生まれ、富山大学教育学部卒、富山市立神明小学校教諭を振り出しに教員として38年間勤務。

富山県教育委員会高岡教育事務所指導課指導主事、富山県教育委員会学校教育課（児童生徒育成係）主任指導主事、射水市教育委員会教育次長。

2004年～2006年の3年間、県教委で「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業を担当。

2014年3月射水市立大門中学校長にて定年退職。その間、射水市中学校体育連盟会長、射水市中学校長会長、富山県中学校教育研究会会長、富山県中学校長会会長を歴任。

現在、射水市柔道連盟副会長、富山県いじめ防止対策推進委員会副委員長。

富山は、教育熱心な地域であり、学校の教育活動に対しても大変協力的である。「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業もこの地域の方々のご厚意があるからこそ成り立っている事業であると感謝している。私は、10年前に県教委で「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業を担当していた。勤務校でも生徒が地元地域で体験させていただいた。これらの経験をもとに、この事業の概略を紹介したい。

1. 事業誕生のきっかけ

- ① いじめ・不登校等の増加
- ② 地域ぐるみいじめ防止事業の推進 ※地域の子どもは地域で育てようという気運の醸成を図る。
- ③ 「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」事業の開始

2. 事業の趣旨

行動領域が広がり活動が活発になる中学2年生が、1週間、学校外で職場体験活動や福祉・ボランティア活動などに参加することにより、規範意識や社会性を高め、将来の自分の生き方を考えるなど、成長期の課題を乗り越えるたくましい力を身につけることができるようにする。

3. 事業の概要

中学2年生が、5日間学校を離れ、中学校区を中心とした地域社会へ出て、商店、企業、福祉施設等、地域のさまざまな方々の協力を得て、職場体験活動や福祉・ボランティア活動などを行う。

- (1) 実施時期：教育課程上は教育計画に位置づけ、特別活動または総合的な学習の時間を中心に各学校や地域の実情を踏まえ、弾力的に実施している。
- (2) 活動場所：生徒の興味・関心をもとに、地域や学校の実態に応じて、活動内容を創意工夫する。農家、魚市場、森林組合、警察署、消防署、市役所（町村役場）、建設会社、ゴミ処理場、工場、パン屋、寿司屋、食堂、スーパーマーケット、コンビニ、保育所、幼稚園、放送局、新聞社、石油スタンド、ホテル、老人養護施設、病院、博物館、美術館など。

4. 事業の特色

- 生徒にとっては、職場での大人とのふれあいにより、あいさつの必要性、相手への思いやりの心、規範意識の大切さなどに気づくことができる。また、体験先の人々の仕事ぶりから、働く父母の姿を感じ取ることができる。
- 地域の人々にとっては、中学生の実態を見つめ、地域の子どもは地域で育てようとする輪を広げることにつながる。
- 教師にとっては、生徒の新しい姿を知ることになる。また、職場へのあいさつ、打ち合わせなどで職場の様子を知り、視野を広げることにつながる。
- 保護者にとっては、親子の話し合いの場が増えるとともに、子どもの成長ぶりを実感する機会となる。
- 生徒にとっての挑戦だけでなく、教師や保護者、地域社会にとっても挑戦事業となる。



伝統芸能「八尾おわら」について



吉田 渉
Wataru YOSHIDA

富山県民謡越中おわら保存会教育研究部長
1949年八尾生まれ、八尾育ち。燃料を扱う個人商店主。東町おわら保存会会長。2004年富山県民謡越中おわら保存会に教育研究部が設置され、初代部長に就任。子どもを地域で育てるとして、おわらと曳山の指導に当たっている。



橘 賢美
Kenbi TACHIBANA

富山県民謡越中おわら保存会渉外部長。
1952年八尾生まれ、八尾育ち。国民健康保険の仕事に従事。鏡町おわら保存会会長。2005年に保存会が一般社団法人化になり、新体制がしがれたとき、富山県民謡越中おわら保存会渉外部の部長に就任。子どもを地域で育てるとして、おわらと獅子の指導に当たっている。

八尾おわらは、江戸時代に五穀豊穡を願って村中で踊ったことを起源として、昭和初期に町の中を踊り歩くようになり、踊りの優美さと勇壮さが次第に脚光をあび、今ではおわら観光として数十万人が全国から訪れるようになってきた。

八尾おわらは他の伝統芸能と大きく異なって、観光として位置づけるよりも、伝統芸能そのものを生活の一部として「八尾もん（八尾人）づくり」として捉えられている。事実、おわらは子どもの頃から親しまれ、青年までには踊り手として、その後はれ 離し手や三味線・胡弓の演奏を通して唄い手 こよなく愛されていく。

八尾おわらの保存の運動については、伝統芸能継承として技を磨き後継者を育てることを使命として、八尾にある11個の町内会にそれぞれ保存会をつくり、またこれらの上に全体の保存会を設置した。こうしたシステムで、後継者育成をも含めて町全体でおわらを堪能している。

本シンポジウムで主張したいことは、第一に八尾おわらは観光として見せるためのものではなく自分たちが楽しむためのものであること、第二にはそこには（子どもを含め）八尾もん全員が参加していることである。これは、八尾にとっては特別なことではなく八尾に根付いた生活の営みの一環である。以下の二点に絞って当日は説明をしたい。

（1）おわらがなぜ子どもから大人までもが全員で踊り楽しむようになったのか

ももとは後継者育成のために子どもにおわらを躍らせたのではなく、八尾では最初から子どもを八尾もんとして参加させている。この点が、全国の多くの伝統芸能でみられる子ども不在の取り組みとは、根本的に違っている。八尾ならではの展開である。

（2）おわら気質

生活の営みの一環で二つのお祭り（八尾のおわらと八尾の曳山）が八尾もん気質を育み、その気質がお祭りを支え、しかも自然と培われてきた。

例えば子ども時代から運動会や祭りなど、事あるたびに町をあげておわらを演舞している。こうした取り組みがごく自然におわらを盛り上げ、子どもが物心つく前からおわらは子どもにとってかかせないものとなって、八尾もんの気質を育てていく。

最後に、まとめとして我ら大人の使命について一言述べる。曳山とおわらについて生活の営みの一環としてこれを捉え、これに子どもを参加させ子どもを大事にして育てる。これにつきる。✓

「風のお盆には八尾でぜひおわらを。」

わが町の風





子

子どもおわらの演舞



4月23日
14:45~15:00

【会場】
富山大学共通教育棟
C棟C21番教室

シンポジウム終了後、八尾小学校の有志10数人による「おわら」をみなさまの前で披露いたします。みなさまにご堪能いただくために、おわらの踊りについて下記の通り解説します。子どものおわらへの思いが伝われば幸いです。

1. おわら踊り

(1) おわらには旧踊りと新踊りがあります。旧踊りは豊年踊りとして江戸時代から続いており、新踊りは川崎順二氏(保存会初代会長)が豊かな情緒性や農耕の力強さを表現するように昭和初期に文人小杉放庵氏に唄を依頼し、若柳吉三郎氏に振付けてもらった踊りです。青年や大人のおわらは新旧織り交ぜての踊りですが、子どものおわらは旧踊りのみです。

(2) 踊りの振り付けについて

- 旧踊り：素踊り、宙返り、稲刈り：収穫のときののどかな情景としてツバメの宙返りや稲刈りのしぐさを手先の動きと体の動きで表現します。ただし素踊はそうした表現がないものです。
- 新踊り＝男性：農耕を表現／女性：はたる取り、富山の四季を表現。男性は、農作業での力強い美意識を稲刈りと鋤鋤(鋤による農地の耕し)に求め、これを体全体で表現します。また、女性は四季折々の情緒をしなやかさや優美さをもって踊りで表現します。

2. 踊りのチーム

踊りのチームは、踊り手、唄い手、囃し手、胡弓、三味線、太鼓から成ります。

3. 踊る場所

踊りには、舞台上で踊る舞台踊りと街中を踊り歩く町流しとがあります。

競演会場では各町の青年男女や子どもが踊りを競い合います。

- 舞台踊り：時間にして15分～。

囃し1～、胡弓1人、三味線2～3、唄2～、踊り6(男2、女4)～。

- 街流し：街中を踊り歩く。気分次第で人数や演舞時間が変わります。

踊り手数十人～、囃し方十数人、唄、三味線、胡弓、囃し。

4. 富山県民謡越中八尾おわら保存会

(1) 保存会の歩み

- 大正8年(1919年)、おわら研究会発足。
- 昭和4年(1929年)に越中八尾おわら保存会設立。初代会長に川崎順二氏就任。各町内に支部を立ち上げ。
- 平成17年(2005年)一般社団法人。

(2) 事業：継承と技量向上、後継者育成、新しい歌詞づくり、調査研究。

(3) 子どもの本番：運動会、演技発表会、子ども演技発表会。

